

安倍総理大臣とローマ教皇フランシスコ台下との会談  
令和元年11月25日

フランシスコ・ローマ教皇台下、  
ご列席の皆さま、

日本政府を代表して、一言ご挨拶申し上げます。  
教皇台下、日本へ、また総理大臣官邸へ、ようこそお越しになりました。ご訪問を、心より、歓迎いたします。

教皇と私は、ただいま、親しく会談をいたしました。

教皇台下には、天皇陛下のご即位に当たって、慶祝の言葉を頂戴しました。今朝ほどは、東日本大震災の被災者にも、お会いいただいています。私は教皇のお志に、深く御礼を申し上げます。

教皇は若いころから、来日を強く望まれていたと仄聞します。そんな台下との出会いを期待し、本日ここには、大勢の方が来てくれました。麻生太郎副総理が、あちらにいます。教皇と同じ、「フランシスコ」の洗礼名をもつ方でもあります。

さて教皇をお迎えし、挨拶を申し上げるに当たって、教皇の数ある「一般謁見演説」のひとつを、取り上げたいと思います。

2014年1月15日、ヴァチカンでの演説でした。そこで、教皇は、日本で起きたある歴史的事実に、間接的ですが、言及されました。

今からおよそ150年前、1865年3月17日の出来事です。長崎の、大浦という地に建立なって間もなかった教会を、訪ねてきた人々がありました。男女は子供連れ、総勢十人余り。浦上という地の人々でした。

神父、——ベルナルド・プティジャン神父がひたすらに祈る様子を確認めると、その中から、一人の女性が近づきます。

そして、こう、訊いた。「マリア様のお像は、どこですか」。

その言葉が、よほど衝撃だったのでしょうか、プティジャン神父は翌日パリに送った書簡の中に、耳にした日本語そのままを、ローマ字にして書きつけました。「Sancta Maria no gozowa doko」。

日本からカトリック神父が一人残らずいなくなって、その時まで約220年。筆舌に尽くし難い迫害の中、信仰を守り続けた忍従の人々のいたことが、初めて明るみに出た、奇跡の瞬間でした。

助け合い、励まし合って生き延びた共同体には、ある教えが伝わっていたといいます。「7代待てば、海の彼方から司祭が来る」。

この時まで本当に7世代もの長い間、仲間の結束を保ち、信仰を守り抜いたレジリエンスは、時と空間を、宗教の違いを超えて、我々の魂を、いまでも揺さぶらざるにはいません。

しかしながら、歴史とは、苛烈ではありませんか。同じ長崎の、しかも浦上の人々の真上に、やがて、原爆が落ちるのです。

一枚の、写真があります。ところは、長崎近郊のどこか。時は、1945年、原爆が炸裂したあとの、恐らく夏から秋に変わる頃です。

写っているのは、10歳くらいの男の子です。その背中に、力なく瞑目しておぶさるのは、年下の、弟のようです。

少年が、裸足で、直立不動、「気をつけ」の姿勢で立つその場所は、焼き場なのです。負ぶった幼な子は既に命が絶えていて、彼はその子を、土へ返しに来たのでした。

この写真を教皇は、カードにされた。「唇は、噛み締め続けたせいで、血をにじませている。この子の悲しみを表すものといったら、ただそれだけだった」と解説を加え、「戦争がもたらすもの」という言葉と、署名を付して、広く、配布されました。

昨日、長崎でなされた祈りの場でも、同じ写真が使われています。

私は、言葉を失います。原爆がもたらした、悲しみと、苦痛の重みに。それを思いやり、大きな心を寄せて下さる、教皇の、祈りの深さに。

日本とは、唯一の戦争被爆国として、「核兵器のない世界」の実現に向け、国際社会の取り組みを主導していく使命をもつ国です。これは私の揺るぎない信念、日本政府の確固たる方針であります。

私たちはこれからも、核兵器国と非核兵器国の、橋渡しに努めてやみません。双方の協力を得ながら対話を促す努力において、決して倦むことはない、ここに申し上げます。

フランシスコ教皇台下——。戦後七十有余年、日本の私共は、平和と、自由をひたぶるに追い求め、揺らぐところがありませんでした。

国連難民高等弁務官だった、いまは亡き、緒方貞子さんが世に広めたのは、人間一人ひとりを強くし、未来に希望を抱けるようにすることこそが、最も大切だとする思想です。

これを信じ、信じるのみでなく行動で示す若者たちを、日本は育て続けて参りました。このことは、私はじめ、多くの日本国民が、誇りとするところです。

いま、この瞬間にも、青年海外協力隊の諸君は、世界各地の、最も貧しい地域に入り、活動を続けています。

持ち前の粘り強さで、マラリヤに罹ろうとも、貧しい人、弱い立場の人、女性や、子どもたちに、希望を与えようと、努力を惜しまぬ若者たちです。

他方、私たちが平和を享受するいまこのときも、迫害に喘ぐ人がある。理由もないまま囚われの身となり、解放を待ちわびる人々があります。

教皇が、「Proteger toda vida」、つまり全ての命を守ろうと言われたように、このような絶望の淵にある人々の誰一人として、私たちは、見捨ててはならない。

自由を尊び、人権を重んじる私たちは、希望の光が見えず絶望しか見出せない人々を、必ず、救い出さなくてはならないのです。

貧しい人、恵まれない人々に常に寄り添い続ける教皇の姿を近くに拝見し、私もまた、世界をより良き場所とするため、弛まず前進して参りたいと、決意を新たにいたしました。

教皇の言葉から、一つ引用をさせていただくことで、挨拶を終えようと思います。

「課題は、克服するためにあるのです。現実を直視し、しかし、喜びを失うことなく、大胆に、希望に満ちて、献身しましょう」。

ご清聴、有難うございました。